



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田4-16-1ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)  
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am

## 主の降誕

主任司祭 小西 広志 神父

実際に主の降誕の夜半のミサ福音箇所を一緒に読んでいきましょう。そこには人間としてのあるべき姿を回復してくれる幼子の誕生の物語があります。

### 舞台背景

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。」

唐突に、『ルカによる福音書』はイエスの誕生物語の冒頭で歴史の一コマを語り始めます。これがイエスさまの誕生の時の時代背景です。いわば舞台の背景のようなものです。皇帝アウグストゥスは非常に優れた皇帝でした。紀元前二九年におよそ百年間続いた内乱を平定しました。彼の治世はパックス・ロマーナと呼ばれ、ローマ帝国に平和をもたらした皇帝でした。今でもローマにはこの皇帝が築いた祭壇があり、それを平和の祭壇と呼んでいます。皇帝アウグストゥスの時代に皇帝の支配権が絶頂に達したのです。ですので、アウグストゥスの時代といえば平和の時代だった。その地上的な平和に対抗して、天使たちが宣言するのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

皇帝がもたらす平和と飼い葉桶に横たわる幼子がもたらす平和が違うものなのだということが強調されます。

ところで、歴史的にはアウグストゥスの時代に全ローマ帝国に対する人口調査が行われたという記録はないそうです。しかも人口調査の際に先祖の土地に帰れという要求も、一度も出されたことがなかったそうです。さらに、ヘロデ王は既に紀元前四年には死んでいます。キリニウスがシリア提督になったのは紀元後六年から七年です。彼はユダヤで人口調査はしていますが、ガリラヤでは行ってないそうです。そうしますとこのイエスさまの誕生の舞台背景には歴史考証として無理があることになりま。

しばしば行われた人口調査は、イスラエルの歴史の中で不幸の原因となっていきました。ダビデ王はイスラエルとユダに人口調査を命じて神の怒りをかいます(サム下24章)。さらにキリニウスによる紀元六年ごろのユダでの人口調査は税金を取ることを目的に行われましたから、後にユダヤ人の反乱のきっかけとなります。

どうして『ルカによる福音書』は、歴史的に不確かなことを背景にイエスさまの誕生物語を描くのでしょうか。人口調査について書くことで、イエスさまがダビデ家の子孫であることをはっきりさせる目的もあったでしょう。また当時、全ローマは世界全体を意味しました。ですので、イエスさまの誕生の物語が単なるユダヤの出来事ではなくて、全世界にとって意味のある出来事にしようとしたのかもしれない。こんなところからも、生まれてきた幼子のもつ重大さがわかるわけです。

### 馬小屋

ところで、最初にクリスマスに馬小屋を飾ったのはアシジの聖フランシスコだと言われています。が、最近の研究ではフランシスコより以前にクリスマスに馬小屋を飾る習慣があったのだそうです。つまりフランシスコが本家本元ではないのです。すでに一〇世紀ごろから、馬小屋の習慣はあったと記録には残されています。聖書を見ますと、イエスさまが馬小屋で産まれたとは一言も書いていません。

「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」

とあるだけです。そして天使たちも羊飼いに言います。

「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」

羊飼いたちは実際に

「マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」

ここで大切なのは「飼い葉桶」という言葉です。何を意味するのでしょうか。聖書の中にこの言葉が登場するのは『イザヤ書』の冒頭です。イスラエルの民が神に背を向けてしまったことを

「牛は飼い主を知り

ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず

わたしの民は見分けない。」

と非難しています。ですから、飼い葉桶には二つの意味があります。最初の意味は飼い葉桶が貧しさの象徴です。神の子が人となるほどに貧しくなされた。しかも飼い葉桶で横たわるほどに貧しく、小さくなされた。そこに神の愛の深さを見いだすことができます。この神の貧しさを強調するためにフランシスコは馬小屋を飾ったのです。二番目の意味については後ほどご説明します。

さて、「布にくるまって」という言葉に注目してみましょう。飼い葉桶に横たわる布にくるまった幼子。いかにクリスマスの場面です。わたしはこの布をいわゆる赤ちゃんをおくるみする布のことだと思っていました。でも違うようです。イタリア語でこの布のことを fascia といいます。これは包帯のような細長い帯のことです。どうやら幼子は包帯のようなものでグルグル巻きにされていたようです。このことは想像力をかき立てられます。もしかしら布に巻かれたとは死を暗示するのかもしれない。これは私の勝手な想像です。

### 羊飼

さて、イエスさまの誕生物語で今日、私が一番注目したいのが羊飼いです。羊飼いたちが天使に導かれて飼い葉桶に横たわる幼子のもとへと向かいます。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

皇帝アウグストゥスは先ほども言いましたが、ローマ帝国に平和をもたらした。帝国内のいろいろな町がアウグストゥスを「全世界の救い主」と称え、今でもあちこちにその碑文が残っているそうです。しかし、新しい、そして本当の救いの到来は人の手で書かれた碑文に反して、天使たちの宣言で始まるのです。この幼子こそが救い主メシアだと宣言するのです。

天使のお告げを受けて、飼い葉桶へと急ぐ羊飼いたちはどんな気持ちだったのでしょうか。羊飼いはその頃、もっとも卑しい人々でした。人々から蔑まれ、軽蔑されていたのです。彼らには家がなかった。そして町の中に住むこともできなかった。羊と共に暮らし、羊と共に牧草を求めて移動して生活していたのです。さらに彼らは律法の適応を受けない人でした。律法の外に彼らはいたのです。律法、すなわちイスラエルの人々にとって大切な掟であり、自分たちのアイデンティティ。その律法を守る必要のない羊飼いたちは人間ではないということの意味したのです。彼らは人間扱いされていなかったのです。羊飼自身もまたあきらめていたかもしれません。自分たちはあまり意味のない存在なのだと。生きていてもしょうがないと。彼らの表情は暗く、寂しいものだったかもしれません。

そんな彼らのもとに天使が告げるのです。「大きな喜びを告げ知らせる。今日、あなたがたのために救い主がお生まれした。」そして夜空一杯に天使が群れ集まってきて、「天のいと高きところには栄光。地には平和」と神を賛美しているのです。羊飼いたちは驚いたかもしれません。自分たちのようなどうしようもないものところに天使たちがやってきたことに。救い主がやってくるとは聞いたことがあるが、貧しい、見捨てられた自分たちには関係のない話だと思っていた。でも夜空で天使たちが神をたたえている。もしかしら救い主が生まれたのは本当かもしれない。彼らは「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合っ、急いで出かけていったのです。貧しいものが神のあわれみによって高められるのはルカ福音書によく登場するテーマです。神のあわれみによって不妊の女といわれていたエリザベトに子供が誕生した(ルカ1・7-36)。神のあわれみにより老人であったザカリヤは子供を得た(1・18)。神のあわれみによりマリアはいと高き方の子を宿したのです(1・48)。いや、イエス自身が神のあわれみを示す人物なのです。

急いで出かけたとありますから、おそらく自分たちにとって大切な生活の糧となる羊を置いて行ったのでしょう。大切なものを放ってまで救い主に会いに行く姿は、後のシモン・ペトロがイエスさまの弟子になる場面を思い起こさせます。確かに救い主に会いに行くときは何もいらぬのです。

羊飼いたちはどうやってイエスさまを探し当てたのでしょうか。こういうところも想像力を働かせてみると面白いかもしれません。真っ暗な夜。どこにイエスさまが眠っているか、どうやって知ったのでしょうか。遠くの方で小さく光る光、今にも夜の闇に消えてしまいそうな光。その光が羊飼いたちを誘います。羊飼いたちは光の方へと向かって歩みます。次第に光が大きくなってゆく。でも、さっき天使たちが空で見せてくれた神の栄光の光とは全然違う、今にも消えそうな光です。でもとってもあたたかい光です。真っ暗な夜の中で、そこだけがボーっと浮かんでいるようなそんな光でした。

「マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」

羊飼いたちが馬小屋で見たものは飼い葉桶に入れられた小さな赤ちゃんでした。ここで飼い葉桶という言葉が示す二番目の意味が明らかになります。神を知らなかった、あるいは知っていたけれども信じなかった羊飼いたちが、飼い葉桶の中に横たわる幼子を見て、知って、神を信じるのです。飼い葉桶は神を知り、神を信じるきっかけ、手だてとなるのです。恐らく、この飼い葉桶に眠る小さな赤ちゃんを見て羊飼いたちの表情も和らいでいったのではないのでしょうか。暗く、寂しい顔から喜びに満ちた顔へ、失望と絶望にある顔から希望に満ちた顔へと変わってゆくのです。神は神を知り、神に出会って、変えられてゆくのです。もともと創造の時に持っていた神の似姿としての尊厳を取り戻すのです。楽園にいた頃に結んでいた神との絆を回復するのです。

幼子に出会った羊飼いたちはその後どうなったのでしょうか。イエスさまの誕生物語はイエスの誕生に接した人々の反応を三つのタイプに分類しています。

一つは羊飼いたちです。

「その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。」

「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあげめ、賛美しながら帰って行った。」

とあります。神に出会った人はそのことを告げないわけにはいかない。そして、賛美しながら帰って行きました。このようなことをなされた神を賛美したのです。ルカ福音書にはイエスに出会って、賛美してゆく人がたくさん登場します(7・16、13・13、17・15、18・43、19・37)。賛美とは、感謝と表裏一体です。賛美することは感謝することです。創造の時の姿に戻った人間は、つまり、罪によって曇らされていた心が晴れた人間は、そのことをしてくださった神を賛美しないわけにはいかないのです。

二つめのタイプは群衆です。

「聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。」

羊飼いの語る内容に人々は驚きます。ルカ福音書の中にもたくさん驚く人がでてきます(1・21-63、2・33)。神のなされた不思議なわざに驚くだけでは信仰へと至りません。それは種まきのたとえ話に出てくる、「御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がない人々」(8・13)と同じかもしれません。

しかし、驚いている人々の中で唯一の例外があります。それが三つ目のタイプの人。マリアです。

「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」

マリアだけが幼子の誕生の出来事、飼い葉桶の出来事をしっかりと受けとめています。種まきのたとえ話でいえば「御言葉を聞き、それを守る」人です。というのもマリアの心の中には飼い葉桶があったのです。御言葉であるイエスそのものを受け入れる場所があったからです。いえ、マリアの心そのものが飼い葉桶でした。なぜならマリアとイエスは一致していたからです。

実は、飼い葉桶とは、私たちの心を表しているのではないのでしょうか。イエスは私たち一人ひとりのみずばらしい心の中に横たわっておられるのです。クリスマスをお祝いするとき、イエスが私の心の中において安らかに眠ってくださることを想い出してください。私たちはいろいろな欠点や弱さをかかえています。そういう不完全な私たちの心の中でもイエスは安らかに眠っているのです。まずしく、みずばらしい飼い葉桶の中で眠るイエスの姿は、私たちにとって実にありがたい最高の贈りものなのです。このイエスを通して、私たちは本当の人間と。私たちはもう一度、神との間柄、絆の祭に入れさせていただくのです。

本当のクリスマスまでまだ少し間があります。心の中にイエスが横たわる場所をお作りになってください。そして賛美しない人ではなく、賛美する人へ。感謝しない人ではなく、感謝する人に幼子を通して変えさせていただきます。いただきたいものであります。